

中世における制度と知（中世研究 第14号）

上智大学中世思想研究所編

知泉書館 2016年



【目次】

序文 佐藤直子

一 伝統と改良の狭間で——アヴィセンナ以後のギリシャの学問教授の展開 三村太郎

二 ビザンツにおける哲学と制度——ミハイル・プセロスへの塞がれた流れ 橋川裕之

三 十一世紀の修道制と知——カンタベリーのアンセルムス 矢内義顕

四 中世ドイツの女性による神秘主義——ビンゲンのヒルデガルトとマ
グデブルクのメヒティルト エリザベート・ゴスマン

五 ペトルス・アベラルドゥスにおける制度と学知 永嶋哲也

六 トマス・アキナス『対異教徒大全』の意図と構造 山本芳久

七 中世末期、脱大学の知識人——ニコラウス・クザーヌスを中心にして
八巻和彦

八 神のことがらが〈わかる〉——十字架のヨハネの「受動知性」論 鶴
岡賀雄

執筆者紹介

索引
